

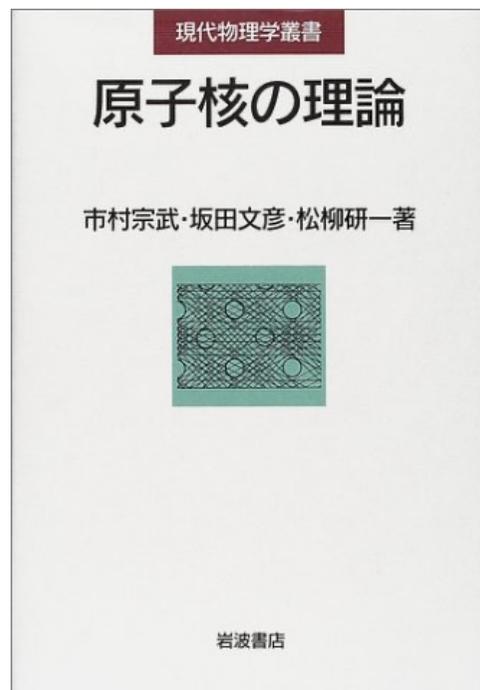


原子核反応概観：非弾性散乱

萩野浩一（京都大学）



長尾さんからのメール：
原子核の非弾性散乱
のレビューをお願いし
たい。現象も理論的
枠組みも両方。



「原子核の理論」(岩波)
市村、坂田、松柳著

第3章「原子核反応」

自己紹介

萩野浩一(はぎのこういち)

専門:原子核理論

低エネルギー重イオン反応(核融合、非弾性散乱)
超重元素、核分裂
中性子過剰核の構造

経歴:東北大で学位→ワシントン大でPD→京大基研助手
→東北大助(准)教授→京大教授

ニュートリノ関係の知り合い:

A.B. Balantekin (Wisconsin)
井上邦雄さん(東北大)
市川温子さん(東北大)
中家剛さん(京大)
Wendell Rogerさん(京大)

ダークマター関係の知り合い:

A.B. Balantekin (Wisconsin)
安達俊介さん(京大)
陳詩遠さん(京大)

Workshop on Inelastic Nuclear
Scattering for Dark Matter
Detection

Jun. 27-28, 2024

原子核反応概観：非弾性散乱

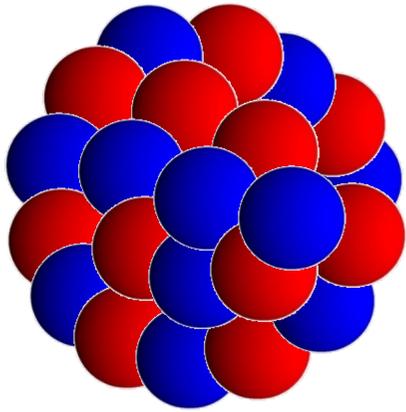
萩野浩一（京都大学）



1. はじめに：原子核反応
2. 原子核の励起状態
3. 各エネルギー領域ごとの非弾性散乱の様相
4. ボルン近似と応答関数
5. まとめ

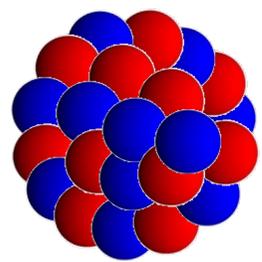
はじめに: 原子核反応

原子核は陽子と中性子から構成される複合粒子

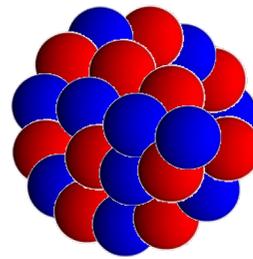
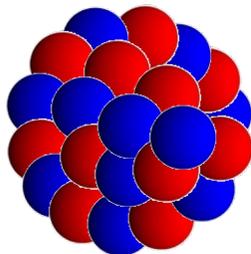


→ 豊富な核反応様式

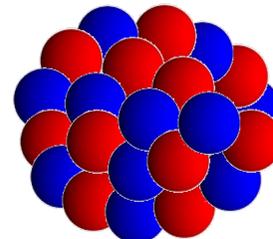
- ✓ 弾性散乱
 - ✓ 非弾性散乱
 - ✓ 核融合反応
- 他にも
- ✓ 核子移行反応
 - ✓ ノックアウト反応など



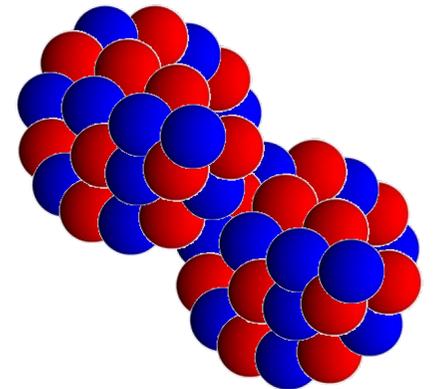
弾性散乱



非弾性散乱



核融合反応



これらは独立ではなく、お互いに影響を及ぼし合っている

原子核の励起状態

E^*

$$\rho(E^*) \sim e^{2\sqrt{aE^*}}$$

平均場理論
(基底状態)

_____ $1d_{3/2}$
_____ $2s_{1/2}$
_____ $1d_{5/2}$

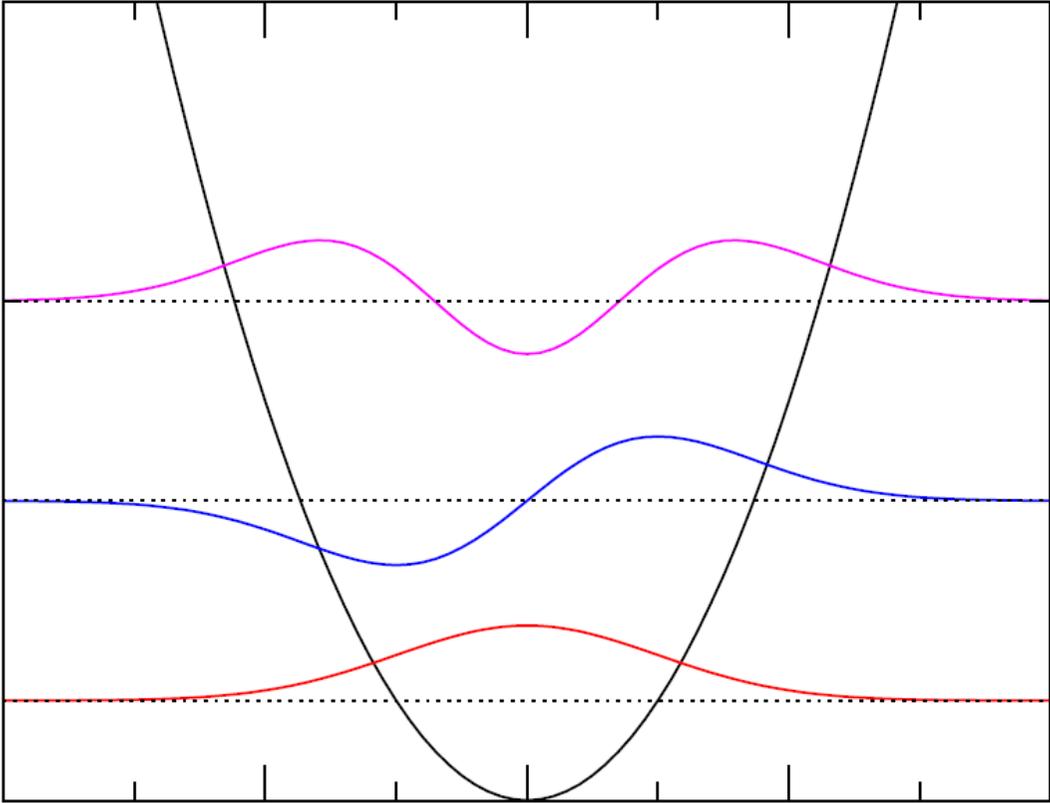
●● _____ $1p_{1/2}$
●● ●● _____ $1p_{3/2}$

●● _____ $1s_{1/2}$

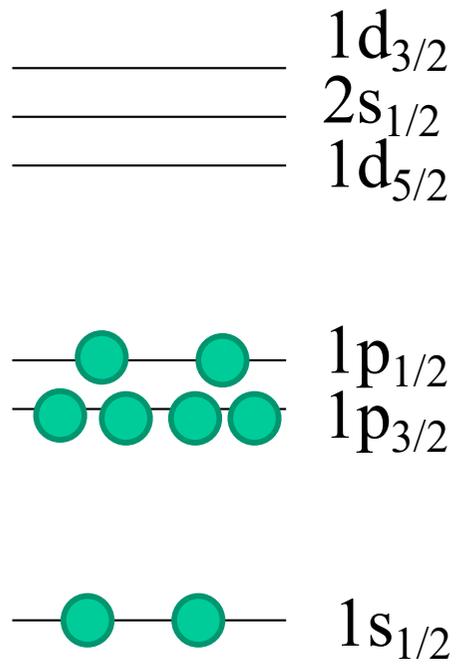
原子核の典型的な
スペクトル

励起状態

ポテンシャル中の1粒子の場合

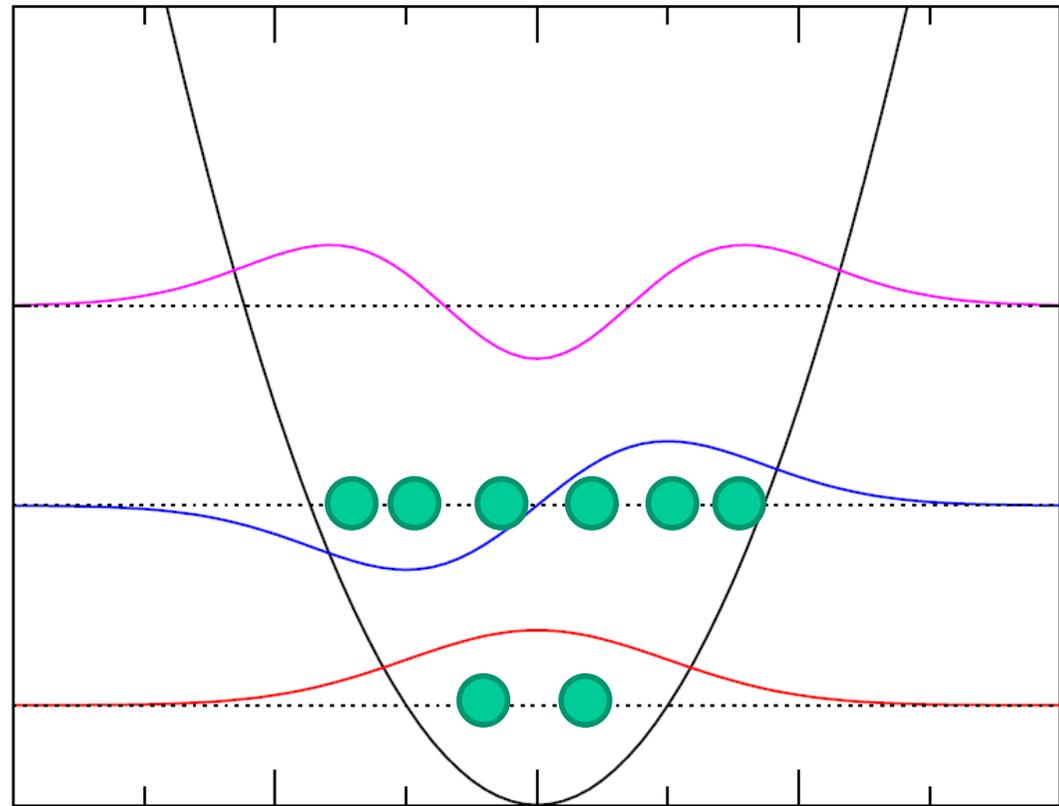


原子核の励起状態



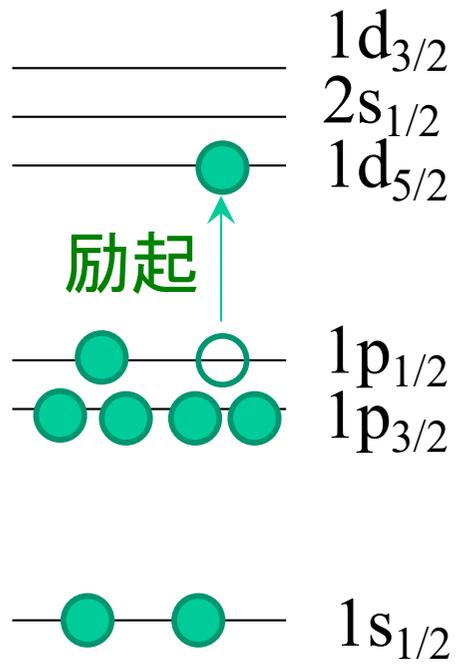
基底状態

多体系の場合

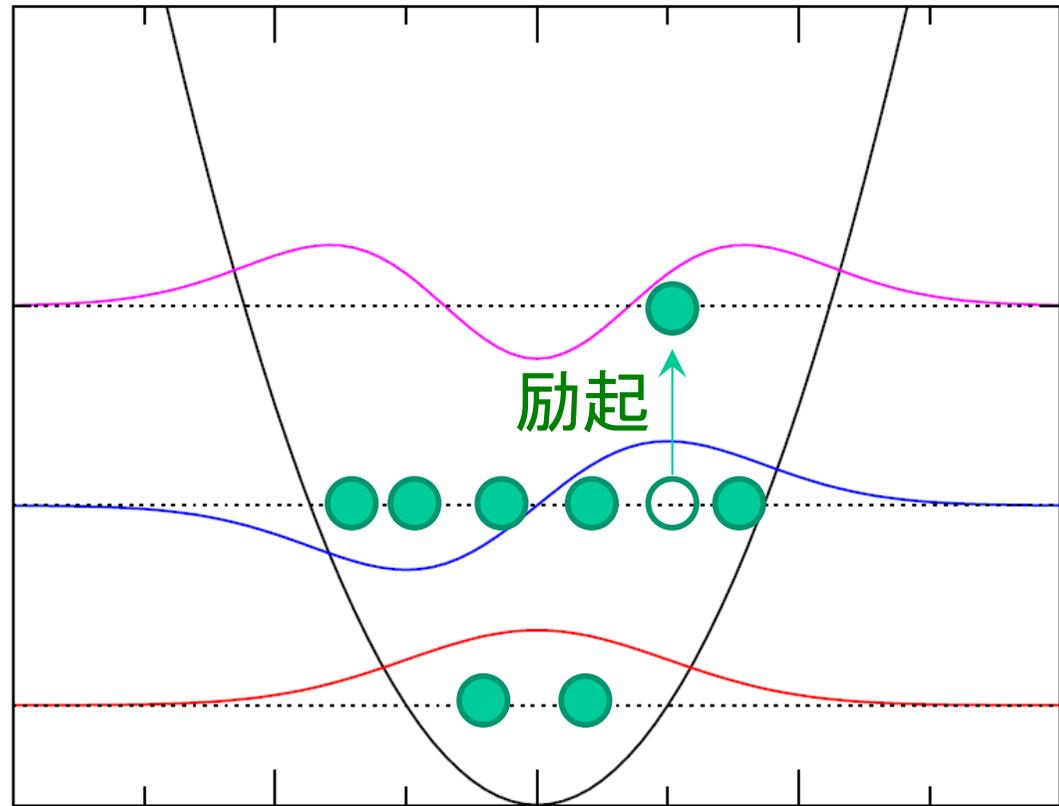


基底状態

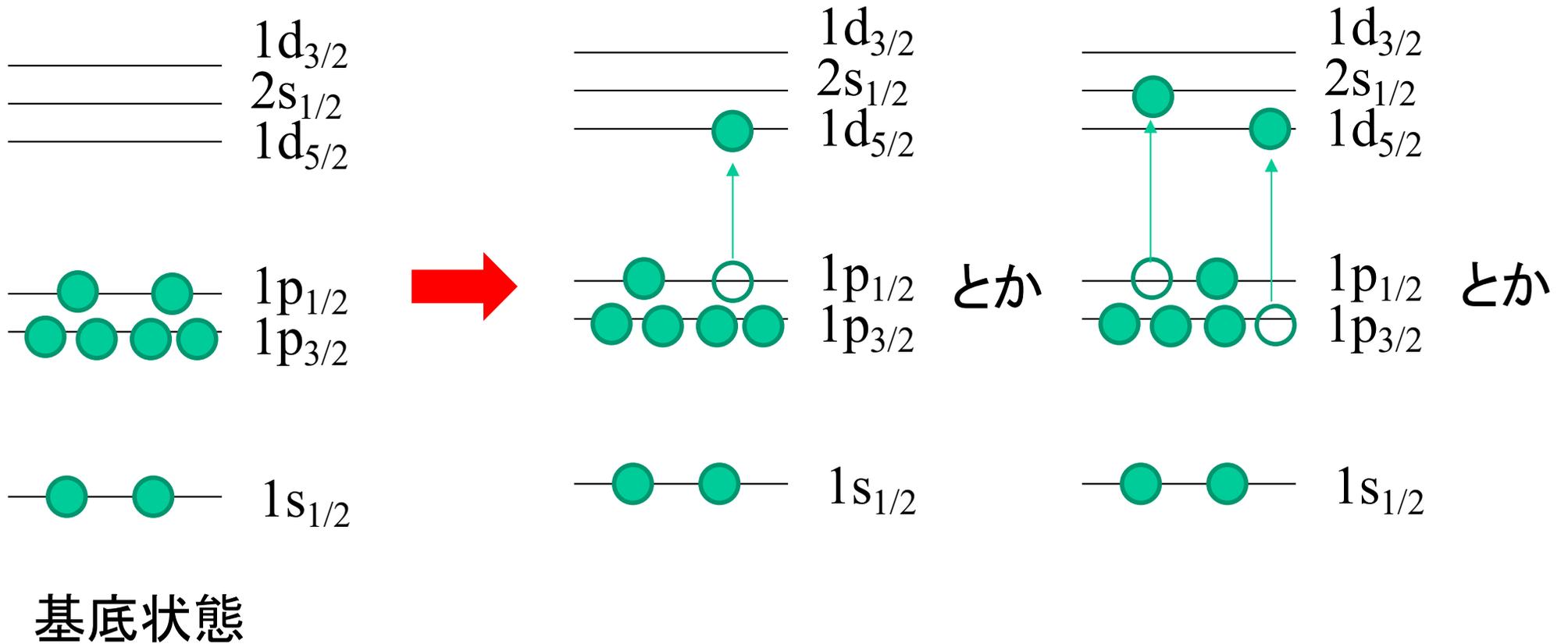
原子核の励起状態



多体系の場合



原子核の励起状態



「多粒子多空孔励起(非集団励起)」と呼ばれる
 → 原子核には他にも「集団励起」がある

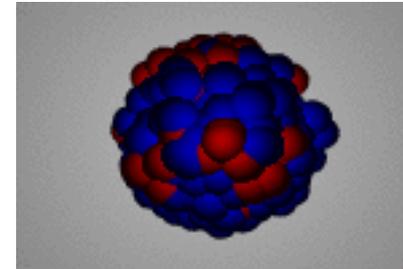
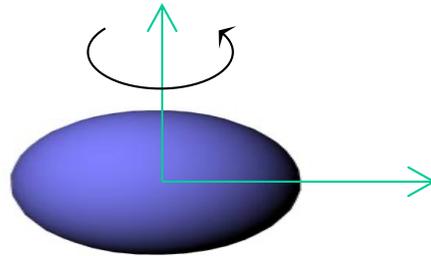
原子核の励起状態

E^*

$$\rho(E^*) \sim e^{2\sqrt{aE^*}}$$

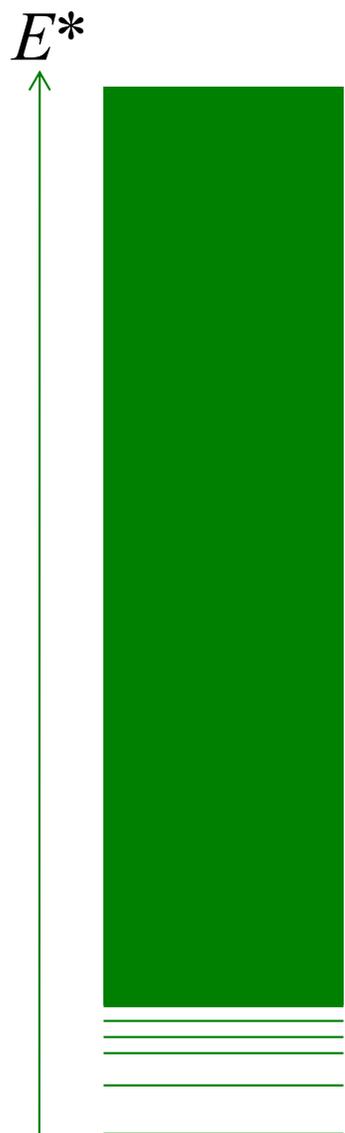
集団励起状態(コヒーレントな励起)

- ✓ 変形した原子核の回転
- ✓ 表面振動



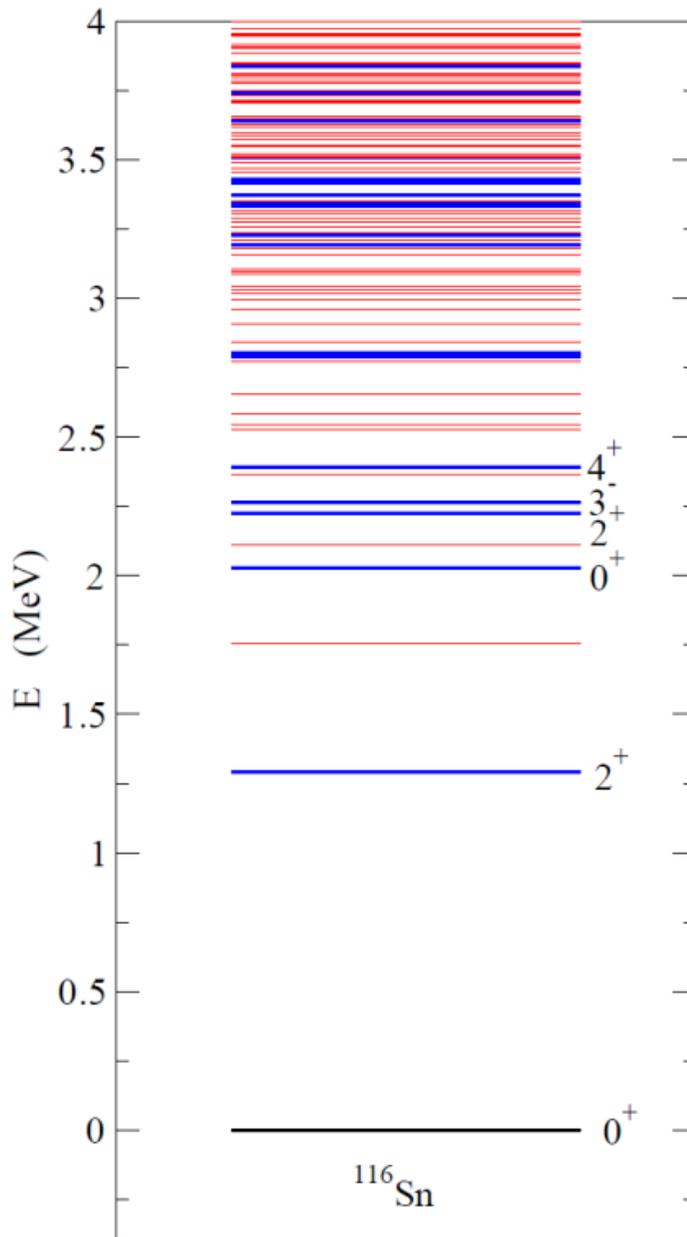
原子核のスペクトル

原子核の励起状態



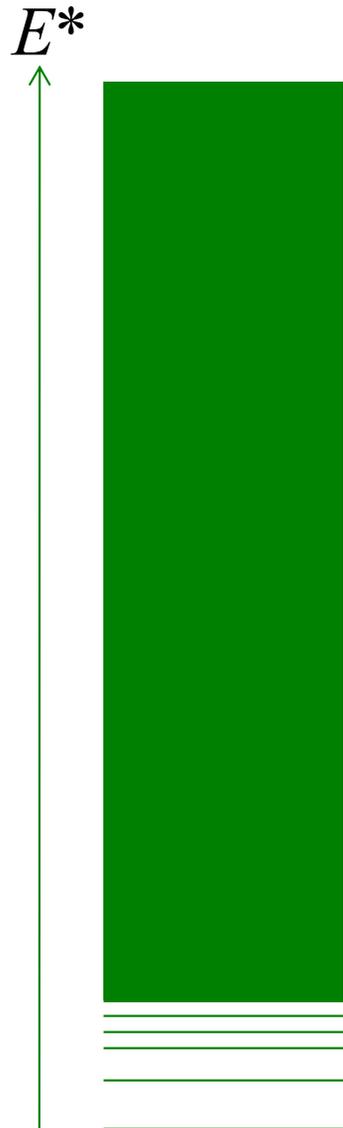
原子核のスペクトル

^{116}Sn の実際のスペクトル



青: 集団励起状態
赤: 非集団励起状態

原子核の励起状態

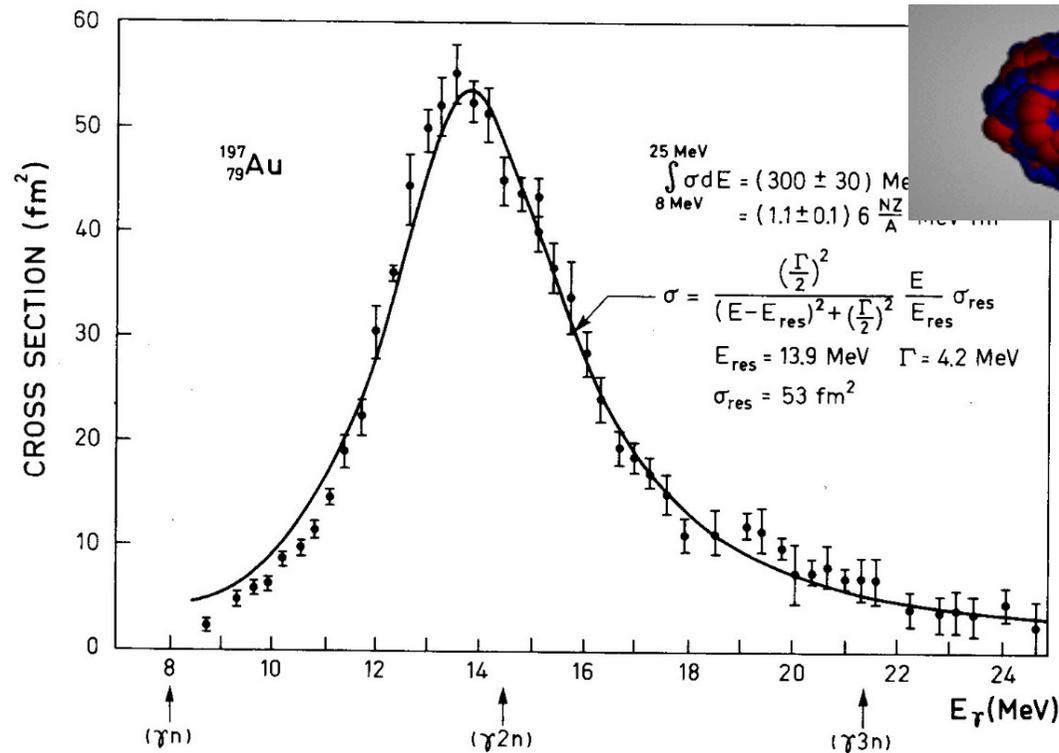


原子核のスペクトル

集団励起状態は比較的高い励起エネルギーに現れるものもある

- 高エネルギーモード(巨大共鳴)
- 低エネルギーモード

巨大双極子共鳴



γ線で原子核を叩いて励起させる

原子核の励起状態

これらの表面振動(集団励起)は、一粒子励起の
コヒーレントな重ね合わせとして理解されている:

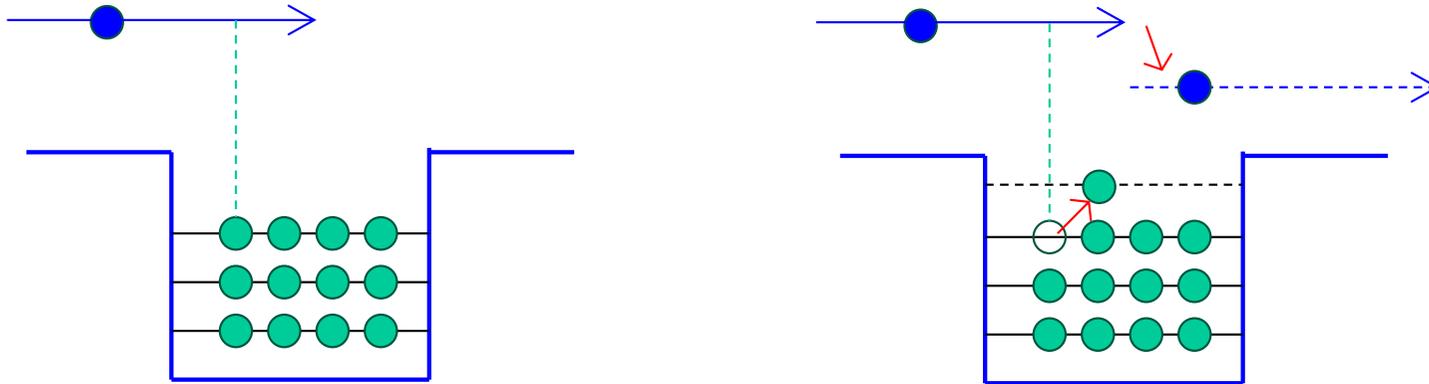
(一番簡単な場合)

$$|k\rangle = \sum_{ph} X_{ph}^{(k)} a_p^\dagger a_h |HF\rangle$$

* 実際の計算ではRPA(乱雑位相近似)が使われるが、
本質はこの式で十分

各エネルギー領域ごとの非弾性散乱の様相: (i) $E/A < 100$ MeV

エネルギーが低いと入射粒子は原子核全体を見る



原子核のつくる平均場
による弾性散乱

$$\left[-\frac{\hbar}{2\mu} \nabla^2 + U(\mathbf{r}) - E \right] \psi(\mathbf{r}) = 0$$

$$U(\mathbf{r}) = \int d\mathbf{r}' v_{nn}(\mathbf{r} - \mathbf{r}') \rho(\mathbf{r}')$$

少数の自由度とのみ
相互作用して飛び出ていく
「直接反応」

- 1粒子励起
- 集団励起

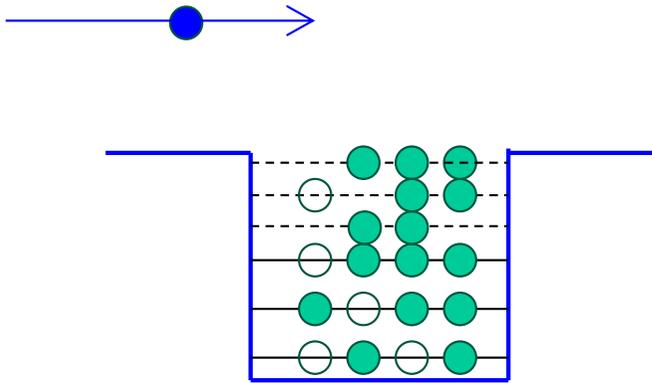
結合チャンネル法

$$\left[-\frac{\hbar}{2\mu} \nabla^2 + \vec{U}(\mathbf{r}) - E \right] \vec{\psi}(\mathbf{r}) = 0$$

K. Hagino, K. Ogata, and A.M. Moro,
PPNP125, 103951 (2022)

各エネルギー領域ごとの非弾性散乱の様相: (i) $E/A < 100$ MeV

エネルギーが低いと入射粒子は原子核全体を見る



粒子の吸収

→非常に多くの自由度

に入射エネルギーが分配

→入射粒子は記憶を失う

長寿命の「複合核」

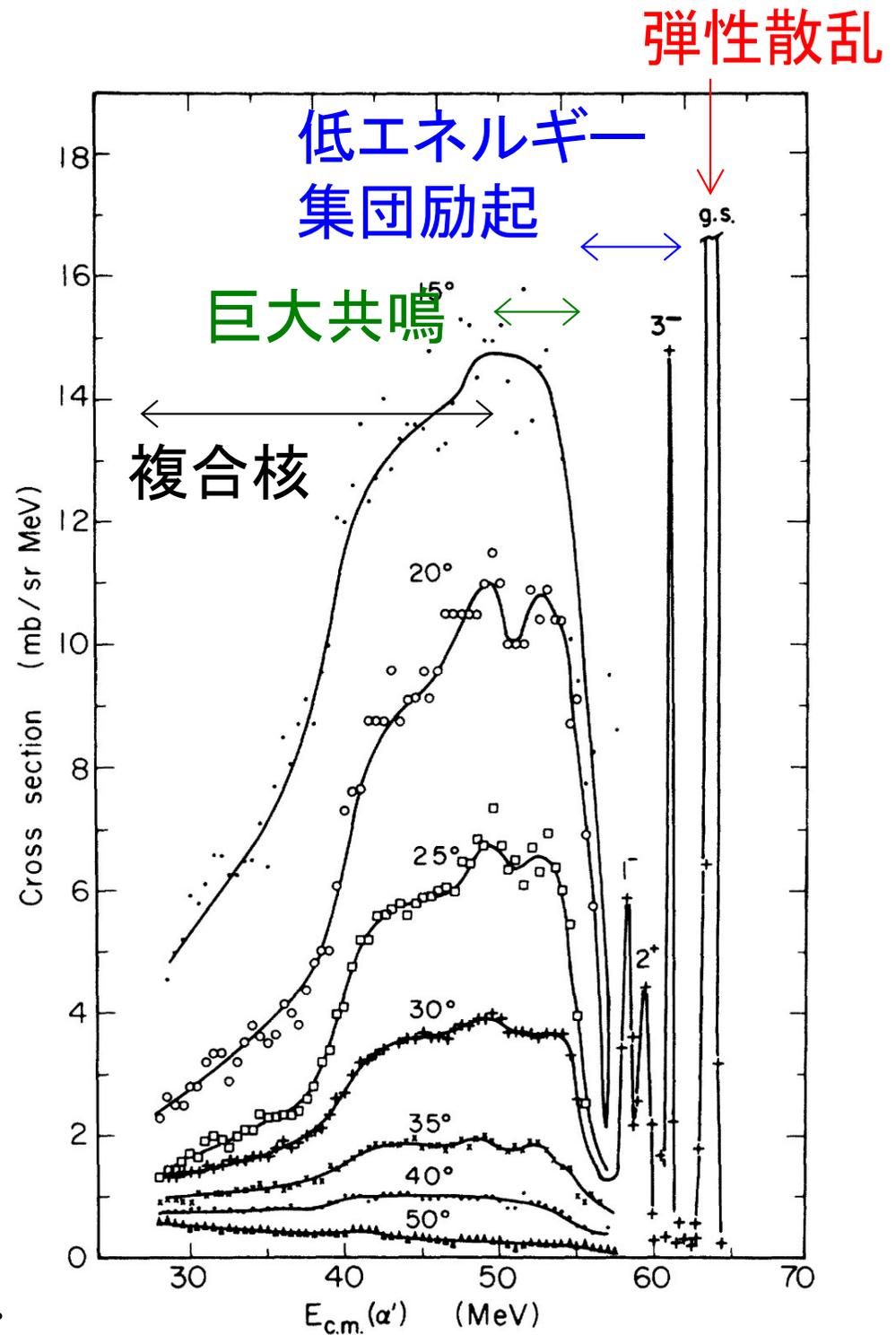
長い時間の後に再びエネルギー
が粒子に集中し放出される

低エネルギー散乱における 典型的なエネルギースペクトル

$^{208}\text{Pb}(\alpha, \alpha')^{208}\text{Pb}$ 散乱

$E_{\text{lab}} = 65 \text{ MeV}$ における
出射 α 粒子の分布

G. Chenevert et al.,
PRL27, 434 (1971).



各エネルギー領域ごとの非弾性散乱の様相: (ii) $E/A > 100$ MeV

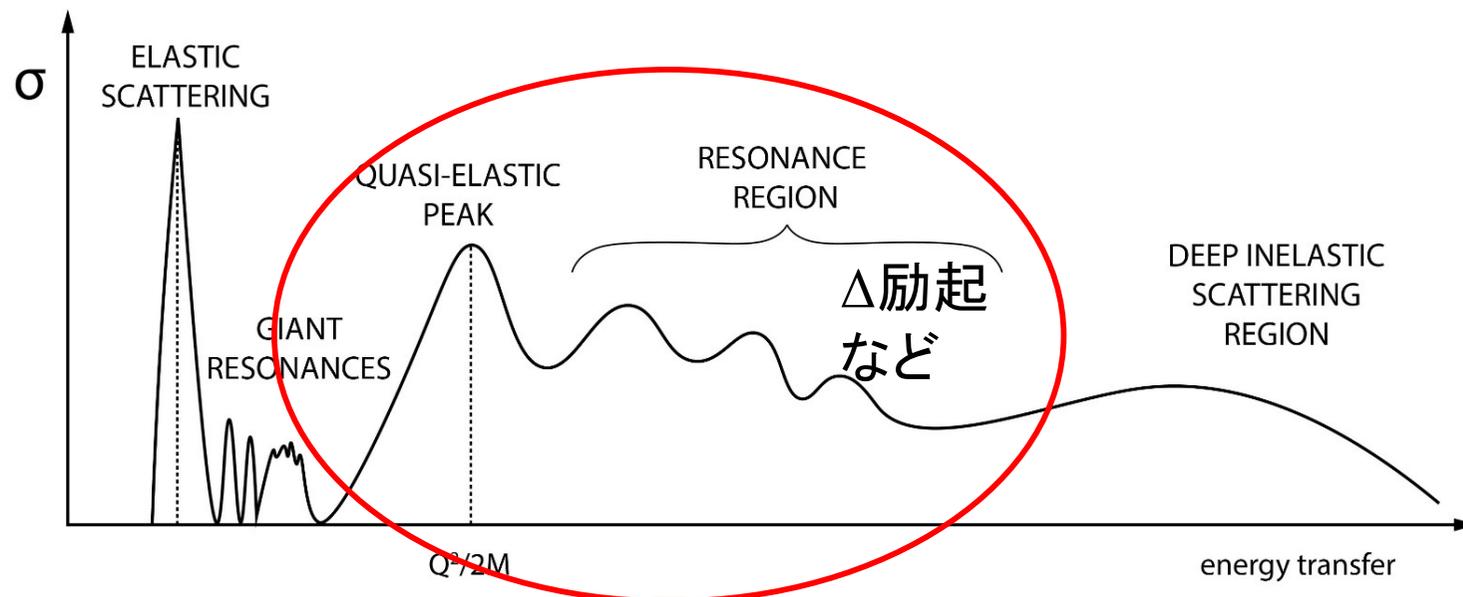
中間エネルギー反応

反応の時間スケールが短い(入射粒子の波長が短い)

→ 1回～少数回の散乱で反応が完結

(核内の核子を1個ずつ見れるようになる)

- 特に、連続状態への励起では、
入射粒子が核内1核子と「自由な」散乱: **Quasi-free scattering**



各エネルギー領域ごとの非弾性散乱の様相: (ii) $E/A > 100$ MeV

ノックアウト反応



緒方一介、上坂友洋
物理学会誌 76, 575 (2021)

(p,2p) 反応や(p,p α) 反応など

高速の陽子を原子核に打ち込み
核内の陽子や α 粒子を叩き出す

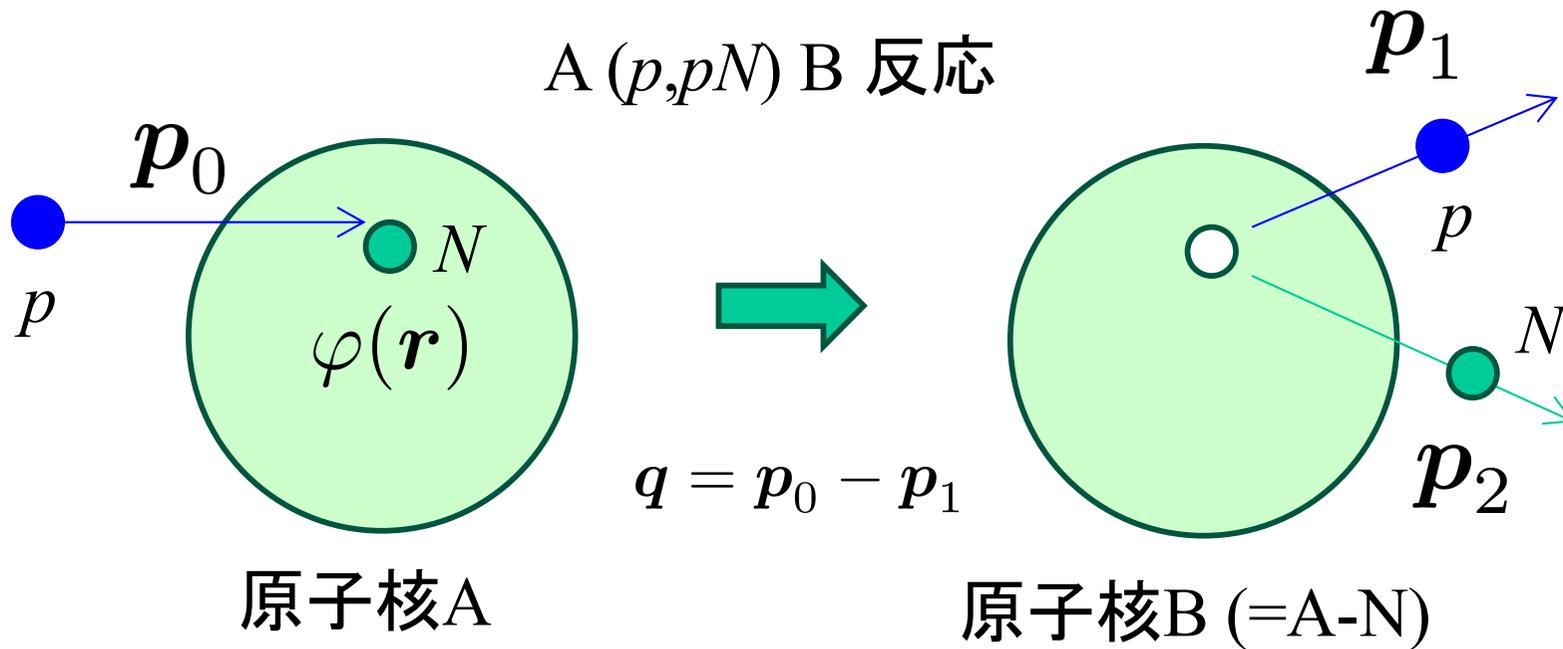


核内の陽子や α 粒子の様子を探る
よいプローブ

「おのころプロジェクト」@RIKEN

上坂

* 自凝(おのころ)島
神々が作り出した最初の島
自凝=核内クラスターに通じる



平面波インパルス近似(PWIA)での遷移振幅:

$$\begin{aligned}
 T = \langle \psi_1 \psi_2 | t_{pN} | \psi_0 \varphi \rangle &= t_{pN}(\mathbf{q}) \int d\mathbf{r} [e^{-i\mathbf{p}_1 \cdot \mathbf{r}} e^{-i\mathbf{p}_2 \cdot \mathbf{r}}] [e^{i\mathbf{p}_0 \cdot \mathbf{r}} \varphi(\mathbf{r})] \\
 &= t_{pN}(\mathbf{q}) \int d\mathbf{r} e^{i\mathbf{Q} \cdot \mathbf{r}} \varphi(\mathbf{r})
 \end{aligned}$$

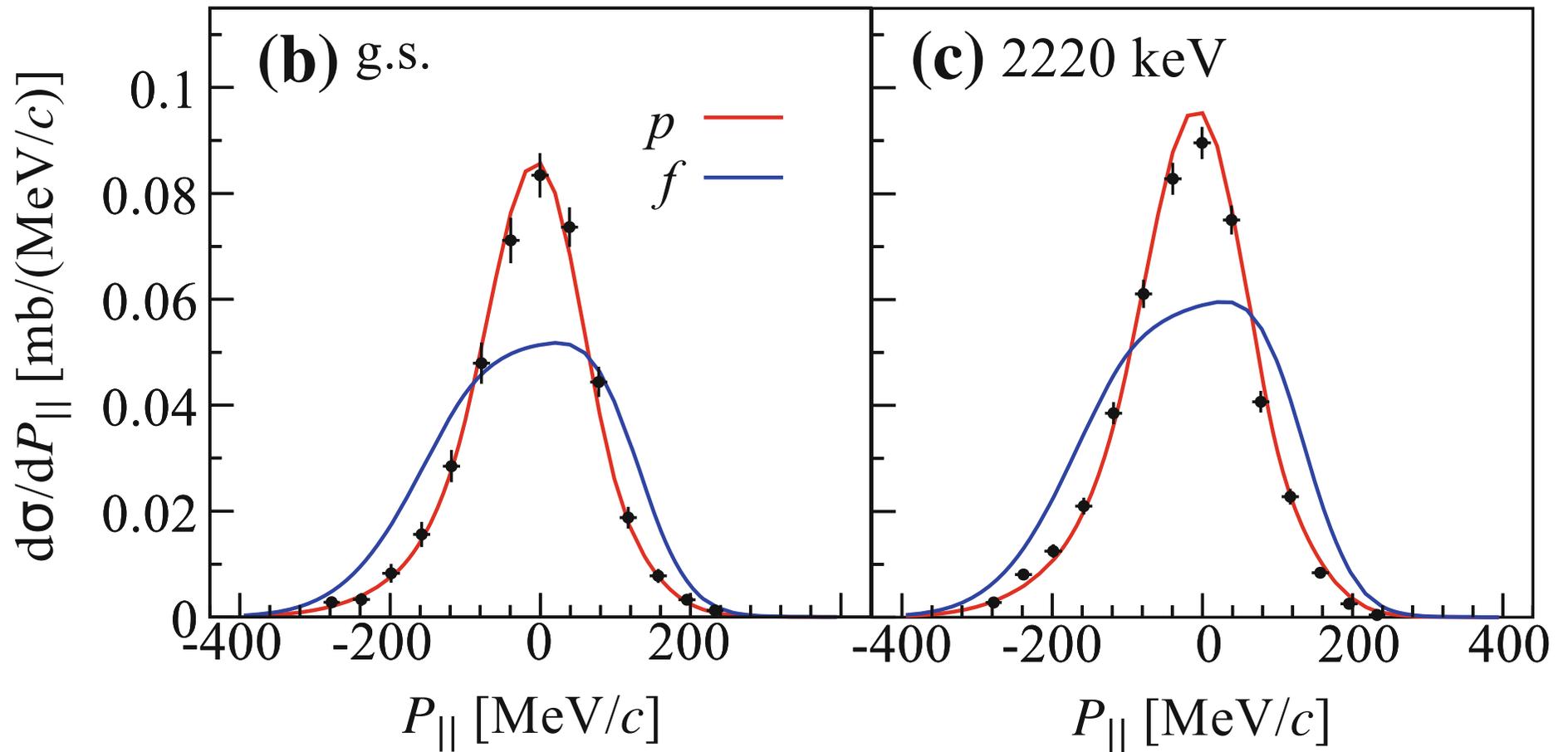
素過程

$$\mathbf{Q} = \mathbf{p}_0 - \mathbf{p}_1 - \mathbf{p}_2$$

* 実際の計算では平面波からのずれを考慮した取り扱い (DWIA) が重要

中性子過剰核 ^{54}Ca の (p,pn) 反応とDWIA計算

^{54}Ca (p,pn) ^{53}Ca (g.s. or e.s.)



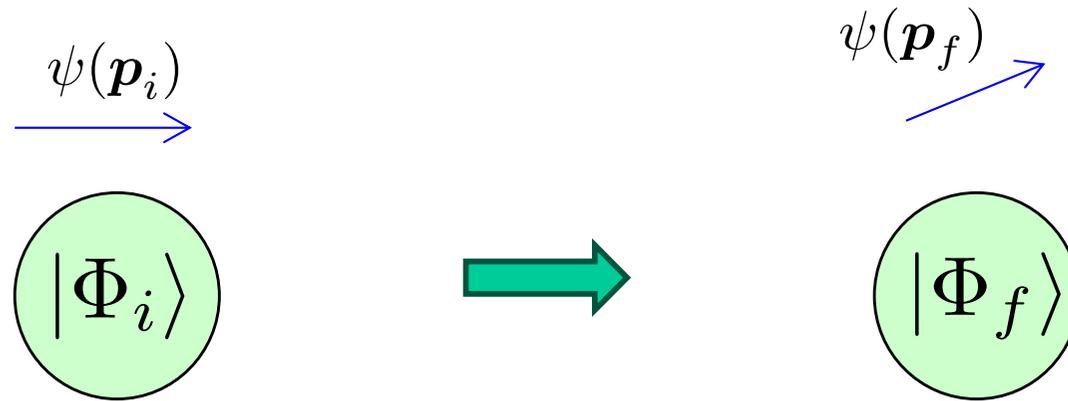
実験: S. Chen et al., PRL123, 1422501 (2019).

理論: K. Yoshida, Few-Body Systems 62, 28 (2021).

ボルン近似と応答関数

- 高エネルギー反応
- エネルギーが低くても弱いプローブの場合 ← ニュートリノやDM

→ (歪曲波)ボルン近似



$$H = T + H_{\text{nucl}} + V(\mathbf{r}, \xi) = \underbrace{T + U(r) + H_{\text{nucl}}}_{\equiv H_0} + \underbrace{V(\mathbf{r}, \xi) - U(r)}_{\equiv H_I}$$

遷移振幅: $T_{fi}(\mathbf{p}_f, \mathbf{p}_i) = \langle \psi(\mathbf{p}_f) \Phi_f | H_I | \psi(\mathbf{p}_i) \Phi_i \rangle$

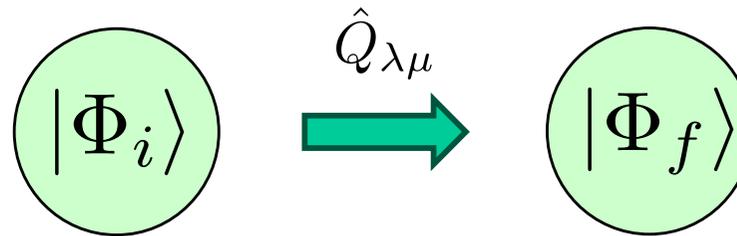
もし、 $H_I = Q_\lambda(\xi) \cdot T_\lambda(\mathbf{r})$ という形に書けるなら、

$$T_{fi}(\mathbf{p}_f, \mathbf{p}_i) = \underbrace{\langle \Phi_f | Q_\lambda | \Phi_i \rangle}_{\text{原子核の励起}} \cdot \underbrace{\langle \psi(\mathbf{p}_f) | T_\lambda | \psi(\mathbf{p}_i) \rangle}_{\text{核反応部分}}$$

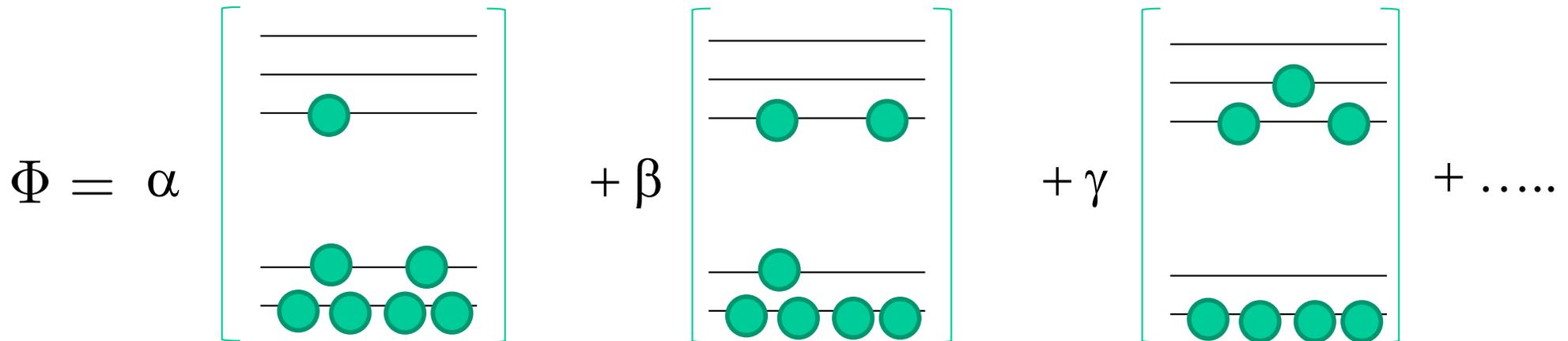
原子核の励起

核反応部分

核行列要素 $\langle \Phi_f | Q_\lambda | \Phi_i \rangle$



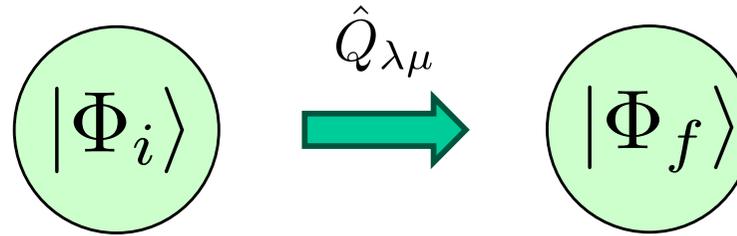
i) 殻模型



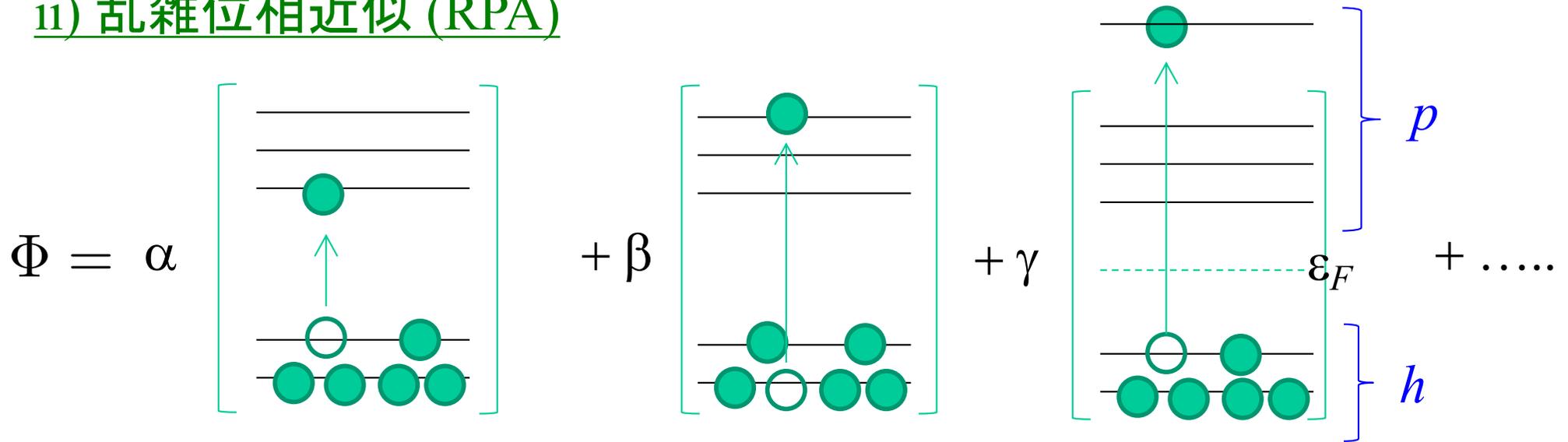
設定した模型空間の中でハミルトニアンを対角化→状態 Φ_i, Φ_f

- ✓ 多くの多体相関を取り入れることができる
- ✓ 基底状態近傍→定量性あり
- ✓ 偶核、奇核とも適用可能
- ✓ **ハミルトニアン行列の次元が大きくなりがち**
→ **重い核や励起エネルギーが大きい状態は苦手**

核行列要素 $\langle \Phi_f | Q_\lambda | \Phi_i \rangle$



ii) 乱雑位相近似 (RPA)



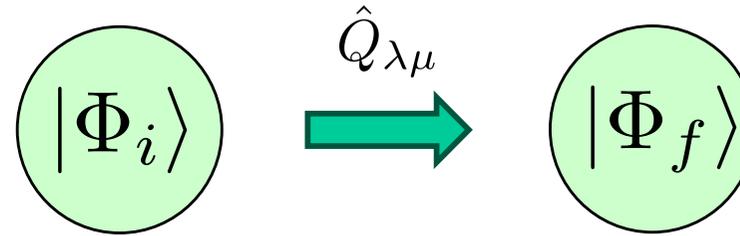
1粒子1空孔状態の重ね合わせとして励起状態を表現する

$$|\nu\rangle = Q_\nu^\dagger |0\rangle = \sum_{ph} \left(X_{ph} a_p^\dagger a_h - Y_{ph} a_h^\dagger a_p \right) |0\rangle$$

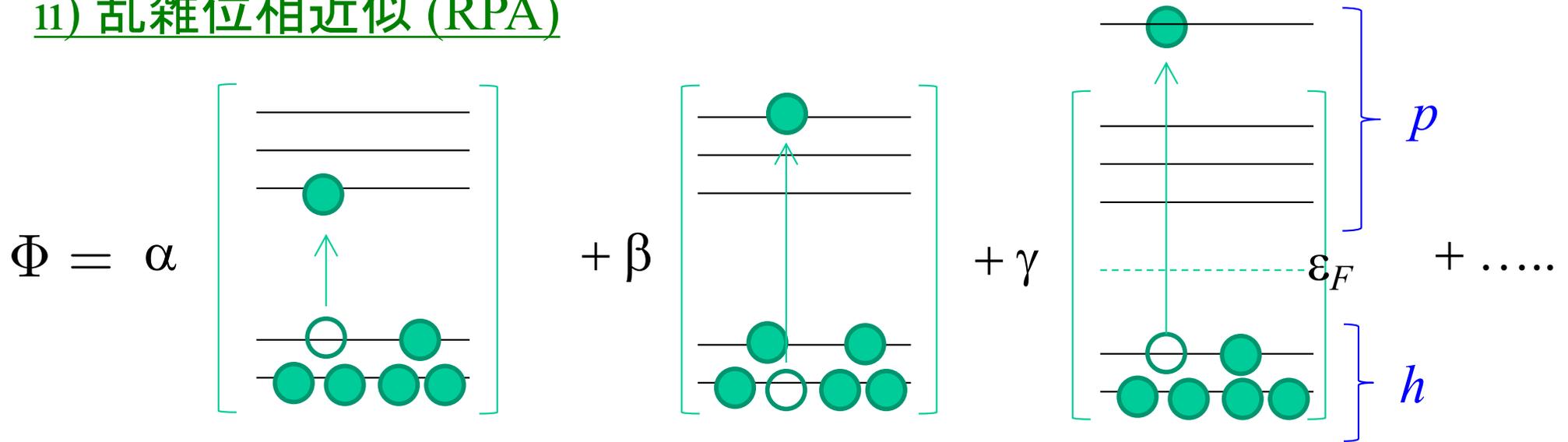
$$\rightarrow [H, Q_\nu^\dagger] |0\rangle \sim E_\nu Q_\nu^\dagger |0\rangle$$

$$\rightarrow X_{ph}, Y_{ph}, E_\nu$$

核行列要素 $\langle \Phi_f | Q_\lambda | \Phi_i \rangle$

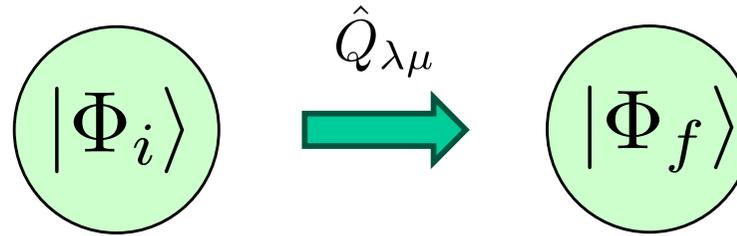


ii) 乱雑位相近似 (RPA)



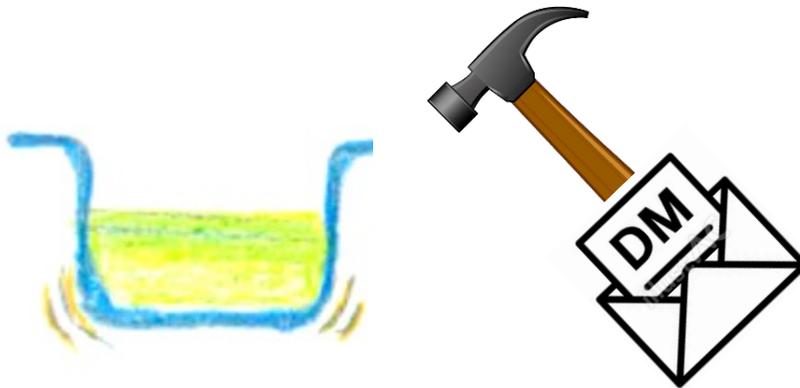
- ✓ 多体相関は主要なもののみ (1粒子1空孔状態に限定)
- ✓ 1粒子1空孔状態の中で truncation はなし
 - 低い励起状態 ~ 高い励起状態 (連続状態を含む)
 - まで統一的に記述できる
- ← DM散乱では重要
- ✓ 原子核の超流動性を取り入れた拡張が可能 (QRPA)
- ✓ 奇核の記述は苦手

核行列要素 $\langle \Phi_f | Q_\lambda | \Phi_i \rangle$



ii) 乱雑位相近似 (RPA)

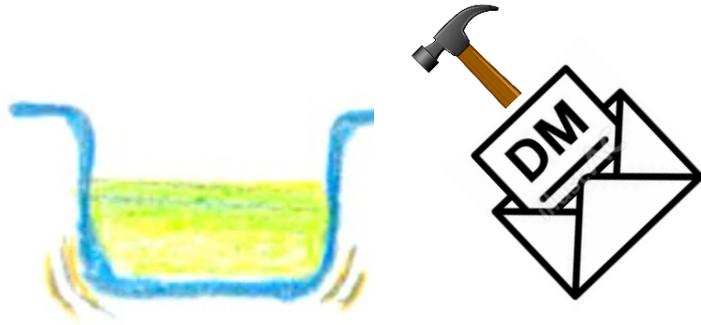
別の定式化: **線形応答理論**



弱い外場で原子核を揺する
→原子核の応答

これを摂動論を使って議論

ii) 乱雑位相近似 (RPA): 線形応答理論



弱い外場で原子核を揺する
→ 原子核の応答

外場: $V_{\text{ext}}(\mathbf{r}) \cos \omega t$

→ 密度の変化: $\rho_0(\mathbf{r}) \rightarrow \rho_0(\mathbf{r}) + \delta\rho(\mathbf{r}) \cos \omega t$

応答関数:
$$\delta\rho(\mathbf{r}) = \int d\mathbf{r}' \Pi(\mathbf{r}, \mathbf{r}'; \omega) V_{\text{ext}}(\mathbf{r}')$$

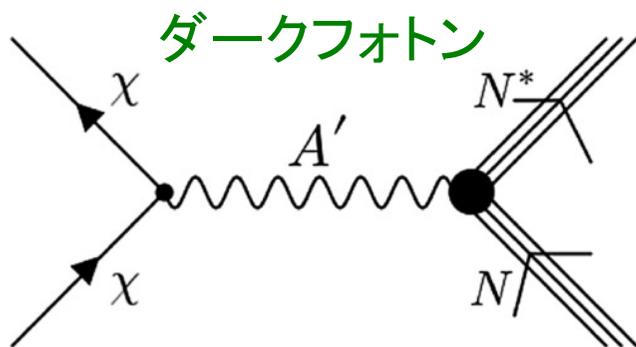
- ✓ 与えられたポテンシャル内での波動関数の変化
- ✓ ポテンシャル自体の変化

強度関数:

$$\begin{aligned} S(\omega) &\equiv \sum_k |\langle \Phi_k | V_{\text{ext}} | \Phi_0 \rangle|^2 \delta(\hbar\omega - E_k + E_0) \\ &= \frac{1}{\pi} \int d\mathbf{r} d\mathbf{r}' V_{\text{ext}}(\mathbf{r}) V_{\text{ext}}(\mathbf{r}') \text{Im} \Pi(\mathbf{r}, \mathbf{r}'; \omega) \end{aligned}$$

ダークマターと原子核の非弾性散乱

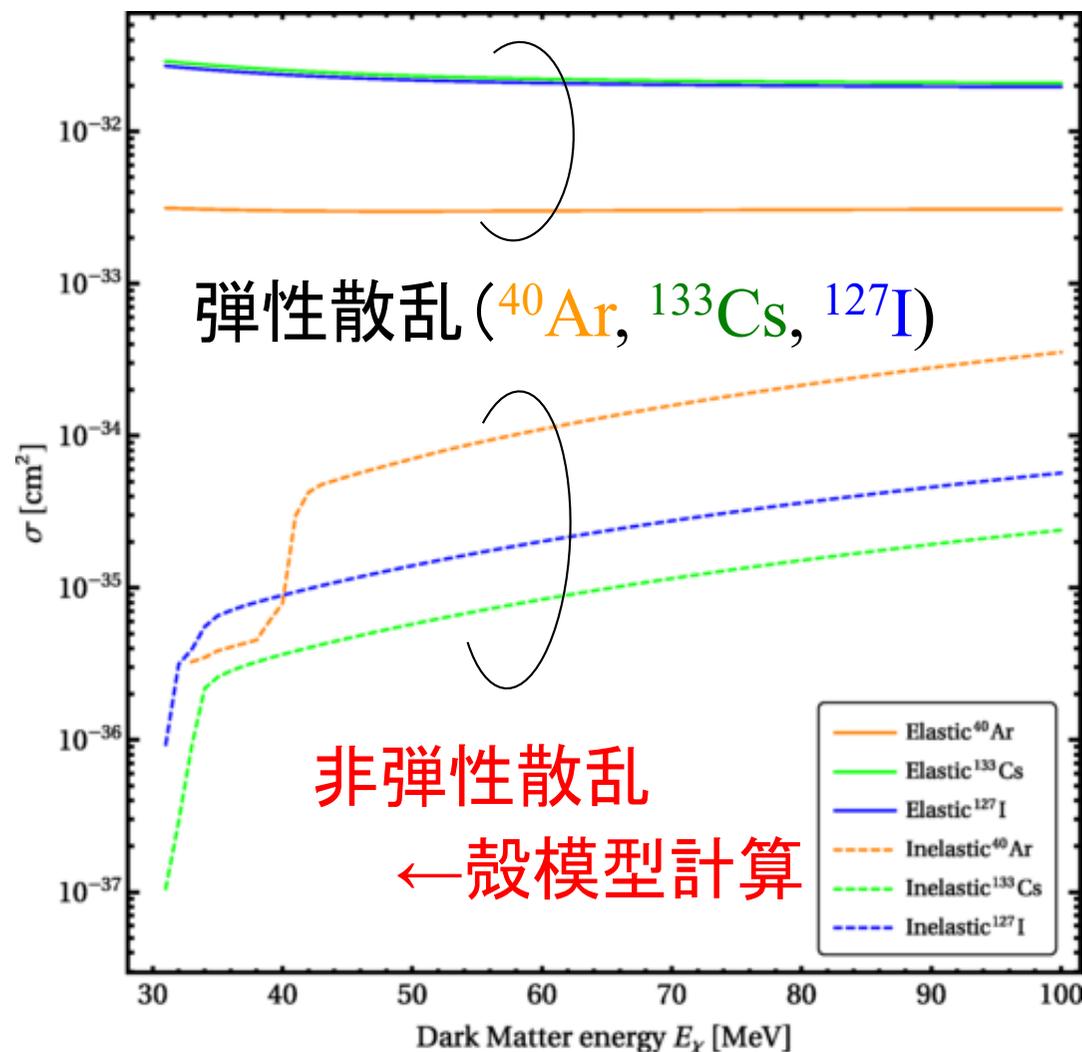
B. Dutta, W.-C. Huang, J.L. Newstead and V. Pandey, PRD106, 113006 (2022).



(長波長近似)

$$\frac{d\sigma_{DM}}{dE_r} = \frac{m_N}{2\pi} \frac{4\pi}{2J+1} \times \frac{2e^2\epsilon^2 g_D^2 E'_\chi{}^2}{p_\chi p'_\chi (2m_N E_r + m_{A'}^2)^2} \times \frac{l \cdot l^*}{2} \frac{g_A^2}{6\pi} \left| \langle J_f || \sum_{i=1}^A \frac{1}{2} \hat{\sigma}_i \hat{\tau}_{i0} || J_i \rangle \right|^2$$

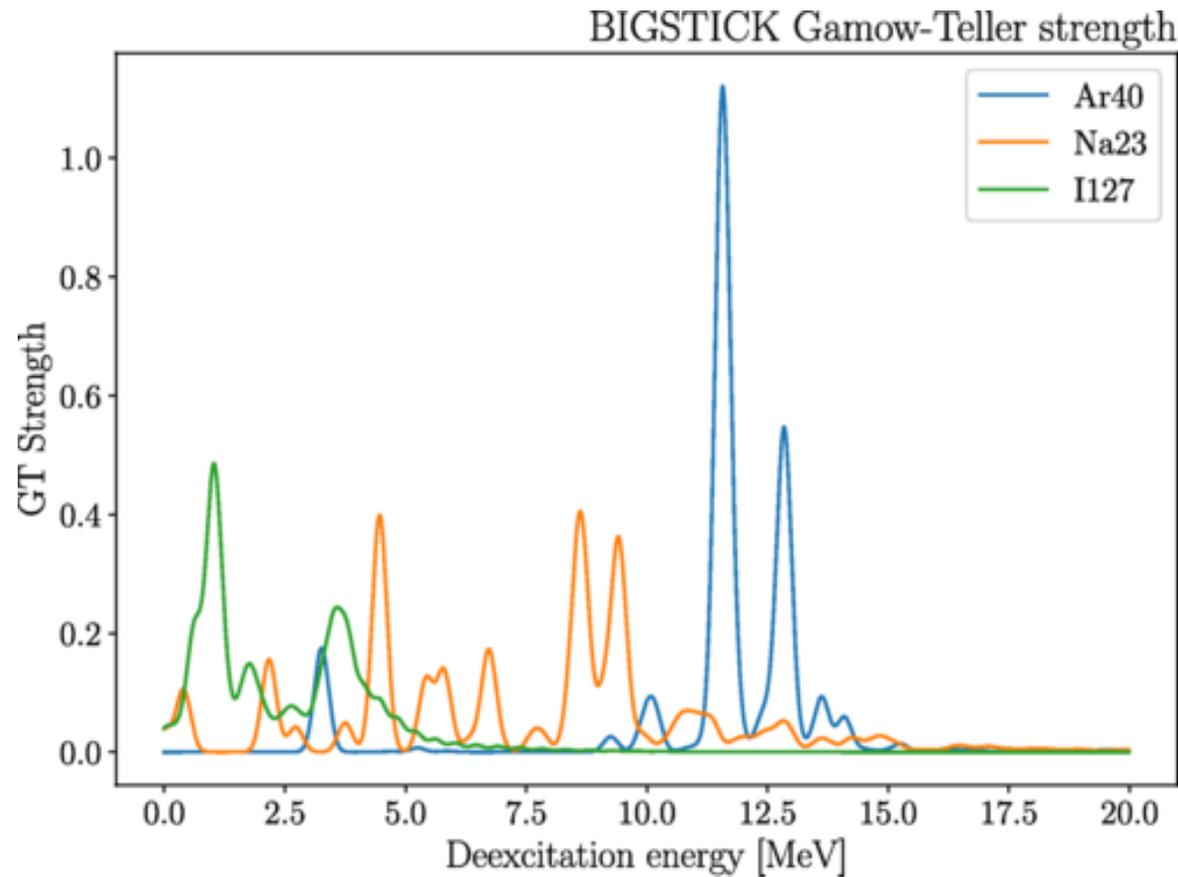
$$l_\mu = \bar{\chi} \gamma^\mu \chi$$



殻模型コード: BIGSTICK (C.W. Johnson et al.)

ダークマターと原子核の非弾性散乱

$$B(GT) = \frac{1}{2J_i + 1} \left| \left\langle J_f \left\| \sum_{i=1}^A \frac{1}{2} \hat{\sigma}_i \hat{\tau}_0 \right\| J_i \right\rangle \right|^2$$



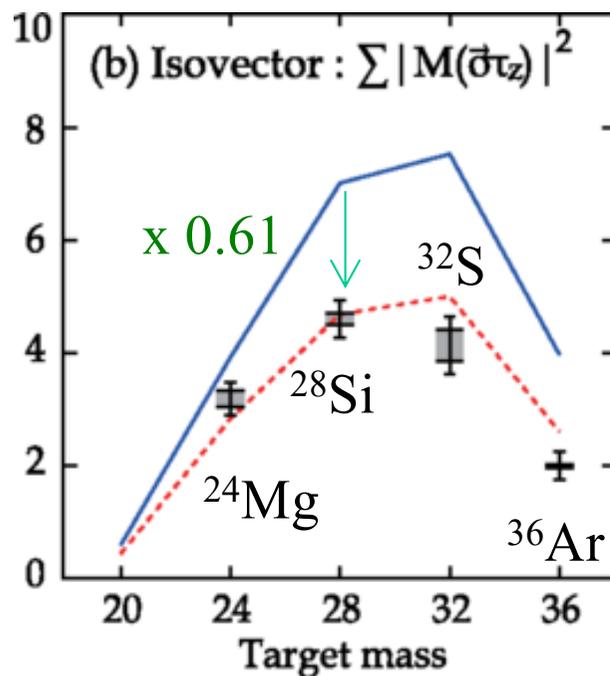
B. Dutta, W.-C. Huang, and J.L. Newstead,
PRL131, 111801 (2023).

ニュートリノ及びダークマターと原子核の非弾性散乱

$$\frac{d\sigma_{DM}}{dE_r} \propto \left| \left\langle J_f \left| \sum_{i=1}^A \frac{1}{2} \hat{\sigma}_i \hat{\tau}_0 \right| J_i \right\rangle \right|^2$$

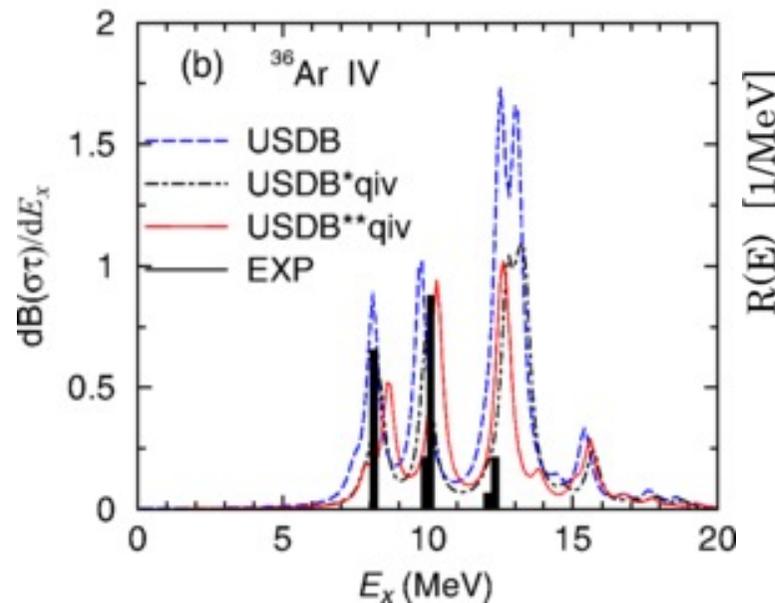
← アイソベクトル型スピンM1遷移

実験(陽子非弾性散乱)



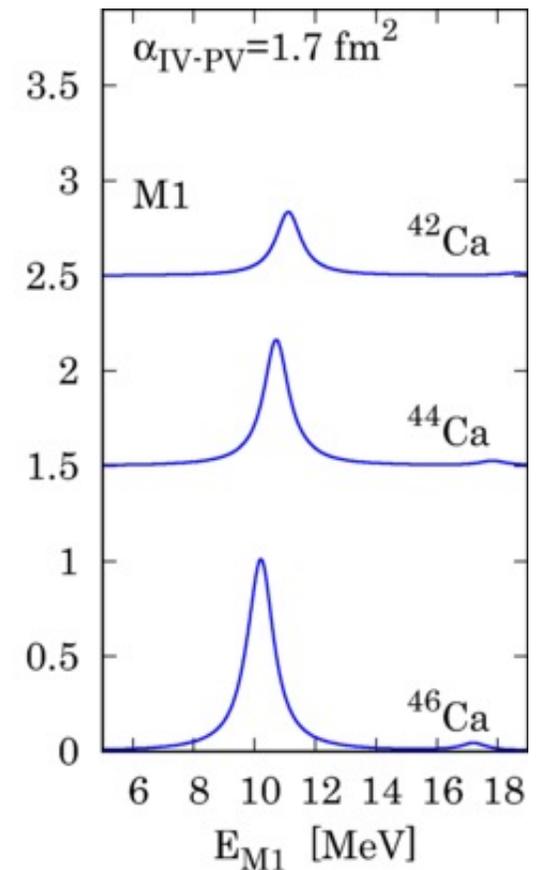
H. Matsubara et al.,
PRL115, 102501 ('15)

殻模型計算



H. Sagawa and T. Suzuki,
PRC97, 054333 ('18)

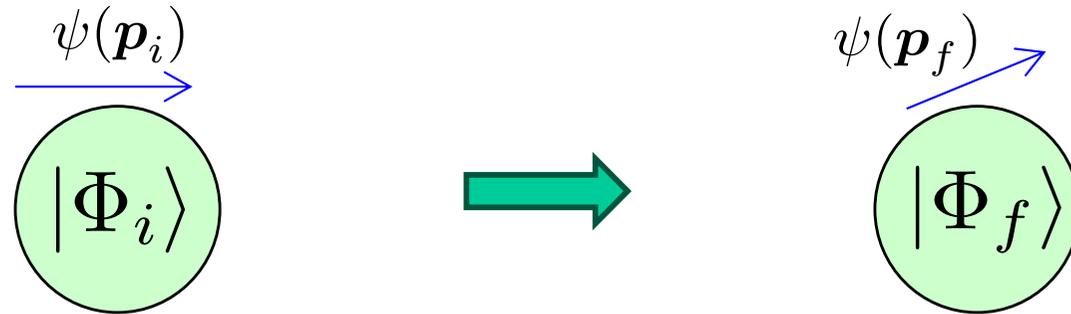
QRPA計算



T. Oishi et al.,
PRC105, 064309 ('22)

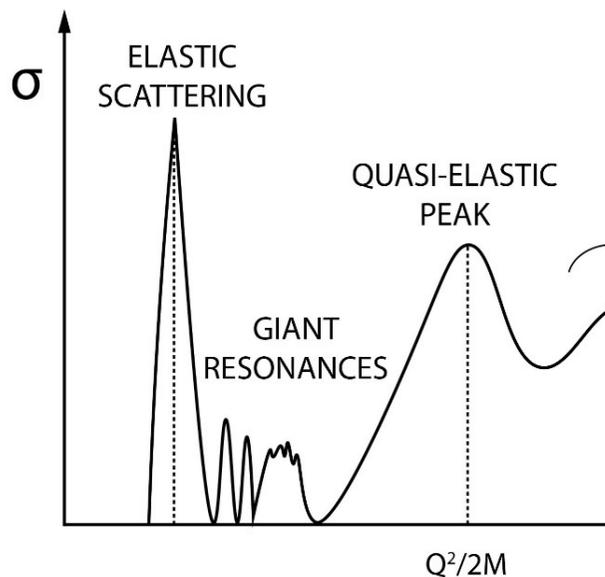
まとめ

DMと原子核の散乱: ボルン近似が十分よい近似(弱結合)



遷移振幅: $T_{fi}(\mathbf{p}_f, \mathbf{p}_i) = \langle \psi(\mathbf{p}_f) \Phi_f | H_I | \psi(\mathbf{p}_i) \Phi_i \rangle$

核行列要素: $\langle \Phi_f | \hat{O} | \Phi_i \rangle$



✓ Dutta らによると $\hat{O} = \sigma\tau$ が主要成分

i) 殻模型

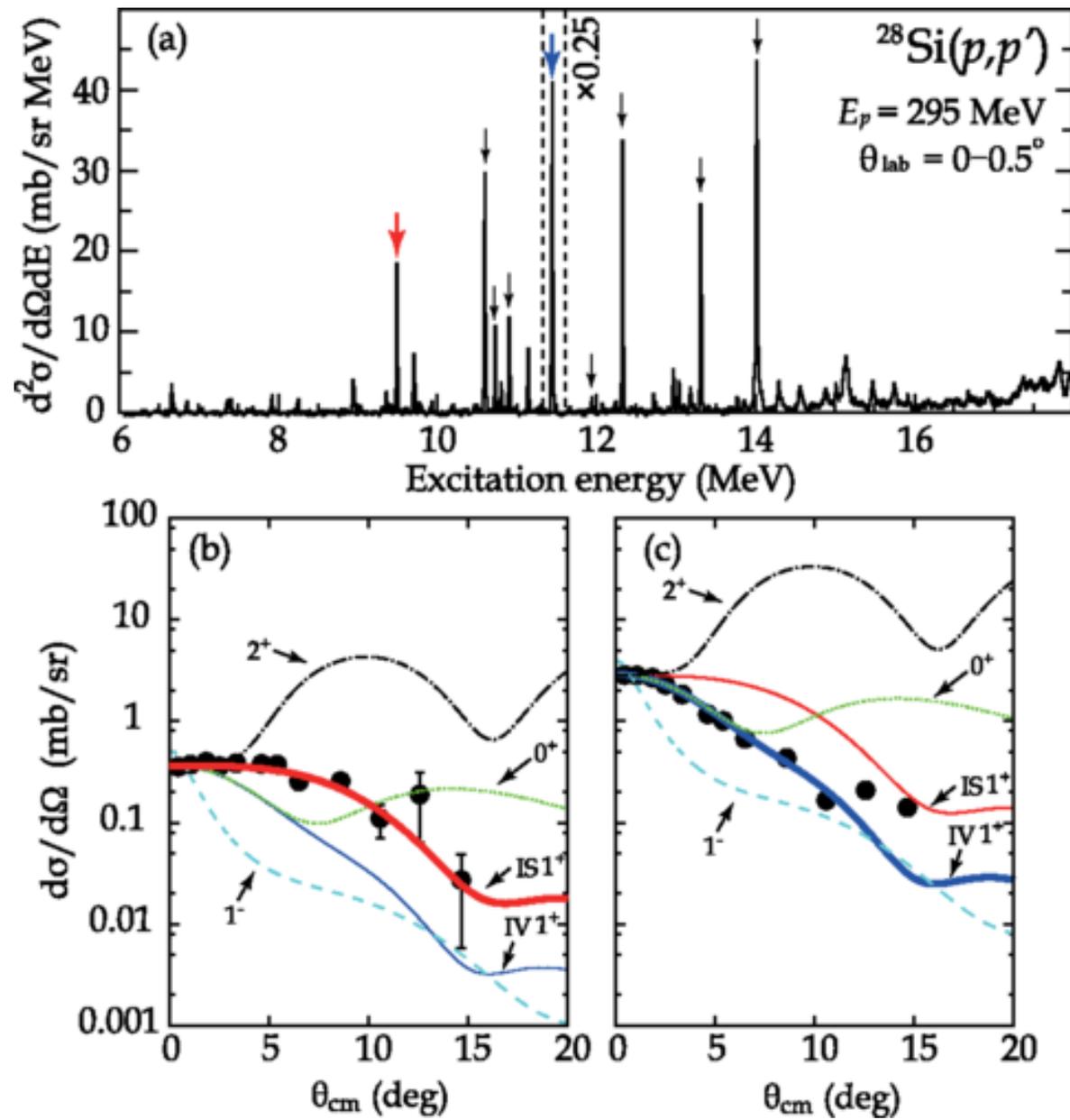
設定した模型空間の中で H を対角化

ii) 乱雑位相近似 / 線形応答理論

✓ 1粒子1空孔状態の重ね合わせ

✓ 低~高エネルギー状態の記述が可能

cf. 2p2h への拡張 (2nd RPA) も可能 ← 湊



H. Matsubara et al., PRL115, 101501 (2015)